

サアデト・アブドゥラエワ
(Ph. D.、芸術学、教授)

世界に鳴り響く楽器—— タール

タールは、おそらくアゼルバイジャン人の間で最も人気のある楽器である。他の弦楽器には似つかわしくないその形は、人の注目を惹きつける。タールの弦から流れ出る瑞々しい鮮やかな音は耳を和ませ、魅了する。これは構造の完成度が高く、とりわけ鋼、銅を擦って作った弦を持つためである。この弦は、民族特有のあらゆる微妙な音の違い、特にムガームという音階を伝えることができる。これを明確に証明しているのが、楽器のネックの部分にムガームのピッチに合致する5つのフレットと、演奏時にのみ使用される低音弦があることだ。広い音域、明るい音色、旋律の美しさ、独特なレジスタ、重旋律的な和音が演奏できること、巧みなパッセージ、音の高まりや減衰が躍動的なこと、音を鮮やかに装飾できること、様々な変化のグラデーション…これらすべてのおかげで、タールはソロとして、さらに伴奏、アンサンブル、オーケストラ用の楽器として用いることができる。しかし、タールはやはり、その妙技と技術的な能力が最大限に発揮されるムガームのソロ用楽器として定評がある。タールはとりわけ明確に人間の感情や気分を伝えることができ、タールの演奏で人間の魂は完全に開かれるのだ。

タールがアゼルバイジャンで最も人気が出たのは18世紀以降のことである。一方、タールが中世から存在していたことはバブ・タイル・ウリヤン、ファルヒ・シスタニ、ガトラン・テブリジ、アサル・テブリジ、ムハメド・フィズリ、ゴヴシ・テブリジといった詩人の作品や細密画が証明している（1、2、3）。

タールは、ペルシア語からの翻訳で、「弦」「糸」を意味する。この語は普通、弦の数が異なる同じ種類の楽器を意味するのに用いられていた。

例えば、エクタール、ドゥタール、セタール、チャルタール、ピャンジタール、シェシュタールという楽器がある。変化している最初の音節は1から6までの数字を意味している。現在のタールのような多弦楽器の名称にこれらの語の語根が選ばれた理由を説明するのは難しい。おそらくは、タールの名称は「ギムタール」という語を簡素化してできたものと思われる。これは「音のなる木」を意味する（4）。中央アジアで人気の多弦楽器タンブル（16本までの弦を持つ）の名称は弦の数で

はなく、響きに基づいたものであるのが興味深い（タン—心、ブルー悩ませる）。

構造的には、パミール地方のルバーブのみがタールと近いとされている。異説では、タールはタンブルとウードのハイブリッドか何かとされている（5）。もっと古い資料には、タールはセタール（6）、もしくはイランに広く普及しているゲイチェク（7）から発生したのだという説も書かれている。しかし、セタールはボディの形状が洋梨型であり、また、皮製の共鳴板の代わりに木製のものが使われていることからこの結論は矛盾する。二段構造になったボディと皮製の共鳴板はゲイチェクに特有のものであるが、タールとは異なり、ネックは短く、ヘッド部分が後ろに沿っている。さらに、この楽器は弓で演奏される。これらの点を考えると、タールがカフカス地方、つまりアゼルバイジャンからやって来たことは否定できない（1、6、7）。

歴史的にタールは、アゼルバイジャンとイランに限定した比較的狭い範囲で普及していた。5本の弦（白2本、黄2本、低音用1本）を持っていた。ボディは大きく、長いネック部分には27～28のフレットがあった。楽器は重いので、演奏時には膝の上または胸より下で持たれていた。

1870年代、タールはカラバフ出身のミルザ・サドイグ・アサド（1846～1902年）により復元された。彼の演奏を聞いて感動した人々が我慢できず「ジャン!」「サドイグ・ジャン!」と叫んだことから、彼は民衆の間ではサドイグジャンとして知られている。彼は弦の数を18本に増やし、その後13



本だけを残し、ネックには22のフレットを残した。ネックは、歪まないようにボディの特殊な張り出し部分に固定され、この張り出し部分の内部には木製のブレースが付けられた。サドイ



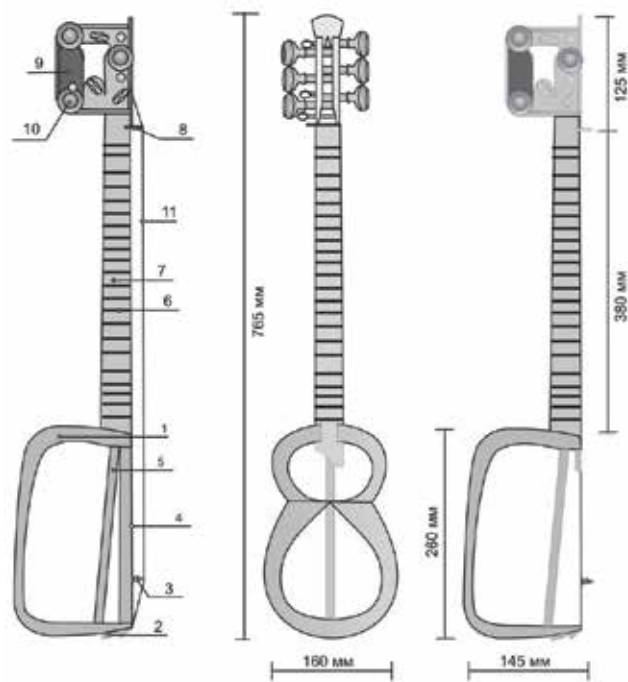
グジャンはボディの厚さを小さくし、サイド部分を真っ直ぐにした。そうすることで、ボディの上部を広げ、音の力を強めることができた。楽器の重量が軽くなったことで、胸の高さで持つことができるようになった。これはタルの演奏能力を飛躍的に高めることとなった。このような構造になったタルは人気を得て、カフカス

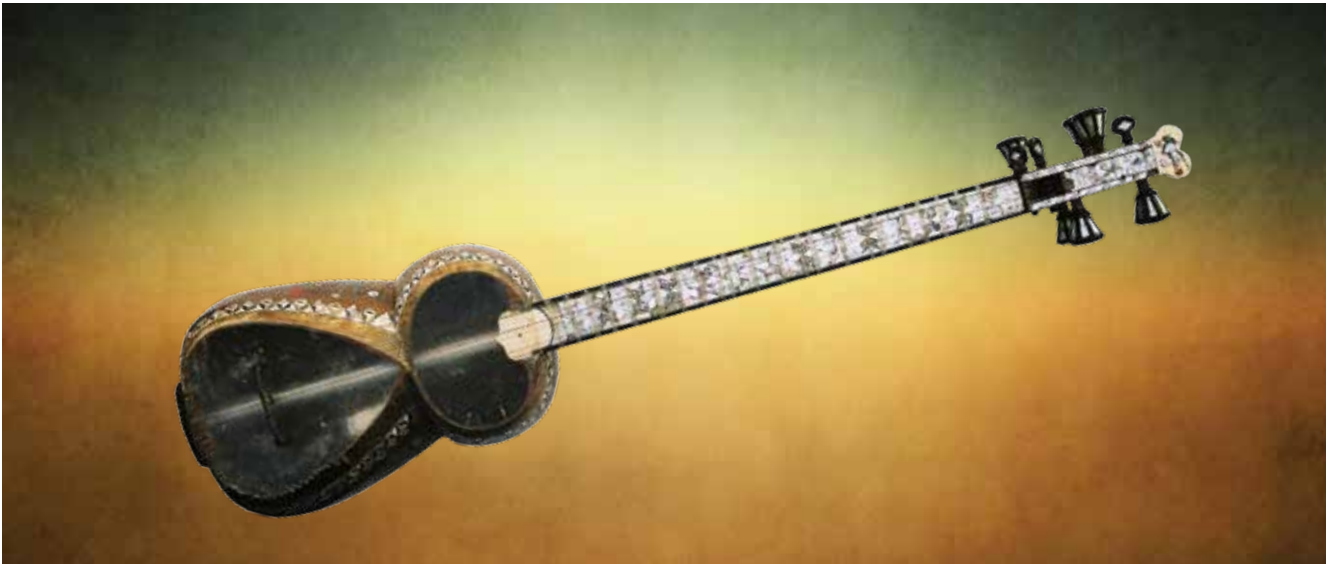
地方全域、トルコのカールス地方、中央アジアに普及した。

5本弦のタルは中央及び南部イランに存在し続けた。20世紀になる頃に、イランの音楽家グラム・フセイン・ダルヴィッシュ（1873～1926年）がこれに6本目の弦を加えた（7）。復元されたタルは、「アゼルバイジャン・タル」と呼ばれ、1875年頃以降にアゼルバイジャンで最も普及することとなった。1929年、もっと安定した調律ができるように、弦の数が11にまで減らされた。

1920～30年代にタルを残すか否かについて幅広い議論が行われた後、アゼルバイジャンの天才作曲家ウゼイル・ガジベコフは、均一に調律された12のピッチを持つタルを楽器として守り抜くことに成功した。さらにそうしたことで、タルを楽譜オーケストラや、オペラ、交響楽団に組み込むことができた。このおかげで大学、特別中等学校、音楽学校などでタルのクラスが開かれるようになった。

タルの構成は次の通り。ボディ





ー（チャナグ）、ブレース（イチ・ゴル）、台木（クプ）、ネック（ゴル）、ヘッド（ケツレ）、ペグ（アシフ）、ナット（ペルデ）、ブリッジ（ヘレク）、弦（シム）である。楽器の長さは830～890mmである。

タールのボディは共鳴器の役割を果たし、長く、膨らんでいるが、両サイドに窪みがある。2つの大小異なる椀型から成り立っている。名人たちは、大きい椀と小さい椀はそれぞれ心臓と腎臓の役割を果たしていると比喩的に語る。音は心臓部で強められ、「臍」（大きい椀から小さい椀へ移る部分）を通過して腎臓で濾過されるというのだ。上から見るとボディは数字の8に見える。ボディは桑の木の固まりをくり抜いて作る。

ネックは長く、前面を上から見ると平らで、下から見ると丸くなっている。演奏時に左手を動かしやすくするために、ネックは上部に行くほど細くなる。ネックは、クルミの木の本心から作られる。

ボディとネックは、桑、杏、クルミの木で作った円錐状の台木に固定さ

れる。

ヘッドは深くて狭い箱のような形をしている。箱の前、上、下は開いている。両サイドと縁には円模様または装飾が彫られている。その上側に先が丸い大きなペグ3つと先が平らな小さなペグ3つが差し込まれる。反対側には大きなペグ3つが差し込まれる。これは梨の木で作られることが多い。

松の木で作られたブレースは四角い形をしている。一方の端をボディの内側の下に、反対側をネックの端に当てて突っ張らせる。ブレースのおかげで、ネックが上下左右に歪むことはない。

ボディの開いている面、すなわち共鳴器の役をなす表板の方に、振動膜として牛（ただし、水牛ではない）の心臓、または、ナマズの胸部の皮が張られる。

ネックには、互いに一定の間隔をあけた22のフレットが横につけられる。この数は、アゼルバイジャン音楽に特有のピッチに合わせている。フレットは羊の細長い腸から作られ、楽器に優しい音を与える。最近では、腸の代わり



に腸線またはナイロン糸が用いられる。そのため、タールの音が少し粗くなったが、フレットは頑丈になった。

大きい腕の表板の中央に、大きいブリッジが配置され、ボディの下部分には下駒が置かれる。ヘッドとネックの接続部分にはナットが付けられる。ネックの上端と中央部分には小さな補助駒が付けられる。下駒以外のブリッジは、ボディとネックの上で弦を互いに一定の高さ、距離に保つためである。

タールには、太さの異なる金属弦が11本ある。下の細い2本の白い弦、黄色い弦と低音弦がメインの弦と考えられている。これらを使ってメロディーが奏でられる。次の赤色の太い低音弦が響き、和音を豊かにする。低音弦より上には、ほとんど半分ほどの長さの白い弦が2本ある。これらは音色を出す弦としては演奏中に押さえられることはないけれど、ある一定の高さを保ってリズムをとり、ムガームの終わりやフレーズの中の響きを出すことで、共鳴の役割を果たしている。

メインの弦（白い弦2本と黄色い弦

2本）および共鳴弦は大きなペグに巻き付けられ、低音弦は小さなペグに巻かれる。弦をこのように固定することで、演奏者は調律の時すぐに、それぞれの弦に合うペグを見つけることができる。

弦は歯のような形をしたピックを使って音を出す。ピックは桜の樹皮、骨、雄牛の角、エボナイト（昔であれば銅または金）で作られる。

ボディ、ネック、ヘッドおよびペグは真珠層と色のついた骨（昔であれば金と銀）の民族伝統の飾り付けが施される。強調すべきは、ネックの表面にある風変わりな模様は、美しさ以外に機能的役割も持つことだ。すなわち、ネック上にフレットを配置する印となるのだ。

アゼルバイジャンの名人が作ったタールは、トルコ、イラン、インド、フランス、オランダで展示された。その一部は世界の名立たる博物館で保管されている。

タールの演奏は座って行われる。この場合、タールは胸の上の方で水平にして持ち、右手で軽く押さえる。そして、ボディの下が演奏者の右肩の少し下に来るようにする。右手の親指と人差し指の間にあるピックでボディの大きい腕の中央部で弦を弾く。この時左手の指3本（人差し指、中指、薬指）で弦を特定の場所のフレットに押し付け、様々な高さの音を出す。親指は楽器のネックを掴んでいる。老練な演奏者は、ムガームを演奏する際、ネックのボディに近い所で小指も使う。弦に引っ掛けた左手の指でも音を出すことができる。

演奏時には様々な運弓法が用いら



れる。例えば、ピックを上から弾く、下から弾く、上から下へ弾く、あるいは逆に下から上へ弾く、素早く上下に弾く、常に上から弾く、上下に弾く、指を弦の上で動かす、楽器を揺らす、ビブラート、グリッサンド、小さい腕または大きいブリッジの近くで演奏する、ポーズをとる、等がある。

作品の中でいくつかの間奏を強調し、これをより鮮明に伝えるために、経験豊富な音楽家はさらに別の複雑な運弓法を用いることもある（ルフト、チャハル、チルトイグ、エリフ、ゴシヤ・ミズラブ、ミズラビ・ギュリリズ、ゼンギ・シュチュリ等）。タールには、他にも躍動的なニュアンスを出す方法がある（例えば、「フン」「ハル・ミズラブ」「ナルイン・ミズラブ」等）。

左手の指の使い方に応じて、例えば「アヂ・バルマグ」「シュルシュデュルメ・バルマグ」「ダルトマ」「ラル・バルマグ」といった様々な名称がある。

2本の白い弦、黄色い弦、共鳴弦はユニゾンを一定の高さに合わせる。つ

まり、これらは常に一定のピッチを持つ。これに対し、黄色い弦と共鳴弦の間にある3本の低音弦のピッチは一定ではない。つまり、演奏するムゲームまたはその作品のキーに応じて、様々な高さに調律される。この場合、低音弦はそれぞれ、持続音または伴奏といった形でムゲームやそのパートに特徴的な基礎を作り出す。

演奏前、タール奏者は必ず演奏予定のムゲームの調性に合わせて調律する。最初に2本の白い弦と黄色い弦、それから共鳴弦を調律し、最後に低音弦を調律する。

タールの音域は小文字オクターブの「ド」から「ソ」まで、および第2オクターブの「変音のラ」「ラ」（ソロ演奏の場合）である。タールのパートはメゾソプラノのところに記入される。

アゼルバイジャンやその国外で、名人である素晴らしいタール奏者（タルゼン）の名が称賛を受けている。例えば、ミルザ・サドイグ、メシャチ・ゼイナル、メシャチ・ジャミル・アミロフ、シリル・アフンドフ、ミルザ・ファラジ、グルバン・プリモフ、ミル



ザ・マンスル・マンスロフ、アフメド・バキハノフ、バフラム・マンスロフ、ガジ・マメドフ、アフサン・ダダシェフ、ガビブ・バイラモフ等がいる。彼らの創作の伝統は才能ある若者たちが受け継いでいる。

タールは、ソロおよび伴奏用楽器として初めて作られたものの1つで、19世紀初頭に結成された拡大版アンサンブルの構成要素として含められた。タールは、サゼンデというアンサンブル（サゼンデ・デステシ）に必ず参加する。このアンサンブルにはタール奏者以外に、ハネンデ（タンバリンを持った歌手）とキャマンチャ奏者が含まれる。19世紀および20世紀前半に大人気であったのは、ジャバル・ガリヤグディオグル、アブドゥルバギ・ズラロフ、イスラム・アブドゥラエフ、セイド・シュシンスキー、ズリフィ・アドイゲザロフ、ハン・シュシンスキーのサザンデ・アンサンブルである。昔も今も、聴衆の間ではムガームのトリオとアンサンブルが人気だ。例を挙げるなら、世界の多くの国々で感動を与え

ているアリム・ガシモフのアンサンブルを挙げるだけで十分であろう。

アゼルバイジャン民族楽器によるオーケストラやアンサンブルにおいてタールは重要な楽器である。ムガーム・オペラでは、その上演中ずっとタールの役割は大きい。アゼルバイジャンの作曲家は、スコアの中にタール用の特別なパートを用意し、オペラやバレエ、さらにはミュージック・コメディでタールの可能性を巧みに利用した。

タールをソロ用の楽器として舞台に初めて導入したのはグルバン・プリモフである。ガジ・マメドフの演奏で初めてヨーロッパ古典の作品が演奏され、さらにアゼルバイジャン作曲家の声楽作品がピアノの伴奏付きで響いた。ラミズ・クリエフの奏でるタールはモスクワで、ロシアラジオ・テレビ交響楽団およびロシア民族楽器アカデミーオーケストラという構成の中で響き渡った。ガジ・ハンマメドフは交響楽団と演奏するタールのための協奏曲を初めて作成し、その後、さらに4つの協奏曲を作曲した。トフィク・バキハ



ノフは5つの協奏曲を書いた（最後の作品はタール、バイオリン、交響楽団のためのものである）。彼らの新たな試みを受け継いだのは、ザキル・バギロフ、ナリマン・マメドフ、ラミズ・ミリシリ、フランギズ・ババエワ、マメダガ・ウミドフ、ナジム・グリエフである。サイド・ルスタモフが書いた民族楽器オーケストラと共に演奏するタールのための第1協奏曲は聴衆の感動を呼び起こした。その後、スレイマン・アレスケロフがオーケストラと共に演奏するタールのための3つの協奏曲を書き、ジャンギル・ジャンギロフも同じような協奏曲を作成した。

アゼルバイジャン作曲家による様々なジャンルの作品は、タールが大きな場所を占めている（例えば、スレイマン・アレスケロフによるタールとピアノのための「ソナチネ」「スケルツォ」、ワシフ・アディオゲザロフの「歌詞のない歌」「リリック・ダンス」、ガサン・ルザエフの「チャハルギャフ」「スケルツォ」「ダンス・トッカータ」等）。さらに、ウゼイル・ガジベコフによる「ファースト・ファンタジー」のスコア、サイド・ルスタモフによる「喜びのダンス」「アゼルバイジャン組曲」、スレイマン・アレスケロフによる「永遠の動き」、ジャンギル・ジャンギロフによる「エジプトの絵画」、アデル・ゲライによる「シャフナズサヤギ」「バグチャクルド」、ト

フィク・バキハノフによる室内オーケストラと共に演奏するタールとバイオリンの二重奏、セヴダ・イブラギモワによる「タールと室内オーケストラのための回想詩」、アゼル・ルザエフによる「思想へ」「タールと室内オーケストラのためのガイタグィ」等がある。

タールがなければアゼルバイジャンの職業的な民族音楽が現在のような高いレベルに達することはまずなかったであろう。まさにこのタールと、それと密接に関わるムガーム芸術を通じて、世界中がアゼルバイジャンの民族音楽の本質と特性を余すことなく知ることとなったのである。

周知のように、中世時代にはウッドがあらゆる楽器の中の「王」として考えられていた。現代においては、アゼルバイジャンのタールにこの同じ表現を使うことができるであろう。

参考文献

1. Abdulgassimov V. Azerbaijani tar. Baku, 1990.
2. Абдуллаева С. Народный музыкальный инструментальный Азербайджана. Баку, 2000.
3. Kərim M. Azərbaycan musiqi alətləri. Bakı, 2010.
4. Dağlı Ə. Ozan-Qaravəlli. Bakı, 2006.
5. Джанизаде Т. Пой, тар. Из истории азербайджанских музыкальных инструментов. <http://www.azcongress.ru/article.php?204>.
6. Халиги Р. Саргозэште мусигийе Иран. Тегеран, 1333/1956.
7. Zonis E. Classical Persian Music. An introduction. Cambridge, 1973.